

1-1 (1)

名古屋 BMT グループにおける多発性骨髓腫に対する single auto-transplant の後方視的解析

(会長要望講演)

小杉浩史

大垣市民病院血液内科

多発性骨髓腫に対する大量化学療法の意味は Attal らによって造血幹細胞移植を伴う大量化学療法によって生存期間の延長効果はじめて報告され、それ以降自家幹細胞移植の評価が確立されたといつてよい。既に欧米では多発性骨髓腫の初期治療として位置づけられている。自家末梢血幹細胞移植では、GVL 効果はないが、完全寛解率、完全寛解期間、無イベント生存期間および生存期間のいずれにおいても標準的多剤併用化学療法に比して優れていることが、case-control 試験、population-based 試験、さらに無作為化比較試験で証明されている。

RCT	N	Age	median F/U	CR rate(%)		median EFS(mo)		median OAS(mo)	
				CC	HDT	CC	HDT	CC	HDT
IFM90	200	<65	7 ys	5	22	18	28	44	57
MAG91	190	55-65	56 mo	NE	NE	19	24	50	55
Pethema	164	median 56	42 mo	11	30	33	42	64	72
Italian MMSG	195	<70	2 ys	6	28	21	34	NE	NE
MRC VII	407	<65	42 mo	8	44	20	32	42	54

また、単回移植と 2 回移植法のいずれの方法がより有効かについても複数の比較試験が行われているが、現状では確定的な結論は得られていないと考えられる。

IFM94	399	VAD x3-4 > <60y (1) Mel 140 mg/m ² (2) (1)& Mel 140 mg/m ² + TBI (8Gy)	6 y	EFS, OAS 延長 CR+VGPR 42% vs 50%
Bologna96	220	VADx4 > HDCY (7g/m ²) > <61y (1) Mel 200 mg/m ² (2) (1)& Mel 120 mg/m ² + BU 12mg/kg	3 y	EFS は延長 OAS に差なし CRR 21% vs 24%

翻って、本邦では、骨髓腫に対する造血幹細胞移植の比較的多数例での解析結果はこれまでほとんど報告されていない。

名古屋 BMT グループにおける 骨髓腫に対する 造血幹細胞移植に関して 2003.11 に はじめて調査を行った。100 例を超す移植が施行されており、これに基づき、後方視的解析を行った結果を報告する。本報告では、骨髓腫に対する単回造血幹細胞移植における現状と将来の課題についても若干の考察を加え、骨髓腫治療進展のために名古屋 BMT グループの目指している方向なども紹介したい。